

研究の目的

ここでは、言語 (=日本語) と統合する教科として「国語」を取り上げることの意義と根拠を先ず明らかにしておく。続いて、「国語」という教科の特性について簡単に説明を加え、最後に「国語」と日本語を統合した本研究の目的を提示したい。

1、子どもを対象とした日本語教育の目標

縫部 (1999) は外国人児童生徒に対する日本語教育の目標として次のような知識や能力の育成を掲げている。

【表 - 2 外国人児童生徒に対する日本語教育の目標 (縫部1999)】

外国人児童生徒に対する日本語教育の目標	
「生活日本語」力の育成	「学習日本語」力の育成
言語能力 ・音声、文字、文法の知識、4技能 伝達能力 ・口頭及び文字による運用能力 文化能力 ・学校生活における習慣や規則に関する知識や理解 ・日本人児童との対人関係形成の力量	学習日本語能力 ・教科学習と結びついた日本語力 認知的学習能力 ・教科学習に必要な基礎的認知能力

「生活日本語」「学習日本語」は基本的には BICS と CALP に対応すると考えられるが、その内実がここではより具体的に示されている。そこで、縫部 (1999) による目標に前項で述べた CALP 習得の重要性を加味して考えれば、子どもを対象とした日本語教育の目標は次のように設定することができるだろう。

【表 - 3 子どもを対象とした日本語教育の目標】

外国人児童生徒に対する日本語教育の目標	
学校生活に必要な日本語力の育成	教科学習に必要な日本語力の育成
言語能力 伝達能力 文化能力	学習日本語能力 ・教科特有の語彙や表現形式に関する知識や理解 ・教科学習に必要な4技能 ・学習の場面での自己表現力 ・目標文化への興味・関心 認知的学習能力 ・思考力 言葉による他者との共感力 ・想像力

ところで、新たに設定した思考力、自己表現力、想像力は、実は小中学校における「国語」の目標としても取り上げられている。

【表 - 4 「国語」の目標】

小中学校における「国語」の目標 正確に表現し正確に表現する力 伝え合う力 思考力 想像力 言語感覚 国語に対する関心/認識を深める 国語を尊重する態度
--

(『学習指導要領』平成 10 年 より)

もちろん日本語教育と国語教育は共に日本語の教育でありながら、母語話者に対する教育か否かという点で目的も性格も大きく異なる。ことに日本語教育は、従来主として非母語話者の成人を対象としてきた。「成人を対象とする」ということは社会生活を営んだり専門性の高い学問を学んだりするのに必要な言語能力を母語においてすでに獲得した人々を対象としていることであり、そのことをふまえて考えれば日本語教育が「コミュニケーション能力」や「運用能力」をより重視しているのは当然のことであろう。しかし先にも述べたように、母語も第二言語も発達途上にある外国人児童生徒にとって必要なものは「運用能力」や「コミュニケーション能力」だけではない。言葉を通して考えたり、自分を表現したり、想像したり共感したりする力を身につけていかななくてはならない。そしてそのような言葉の力を獲得するためには、日本語教育と、思考力や想像力の育成を目標に掲げる「国語」との統合が一つの有効な方策として期待される。

2、「国語」を取り上げることの意義

日本語教育に統合する教科として「国語」を取り上げることには、どのような意義が見いだせるのだろうか。literature を取り上げた先行研究を手がかりに考えてみたい。Custodio & Sutton (1998) は英語と読み物を統合した literature-based instruction を中学校段階の ESL で 8 年間実践している。取り上げる作品は小説・物語とノンフィクションの両方を含み、日本の「国語」の教科書の文種と共通している。Custodio らがあげた読み物を取り上げる利点について、「生活」「学習」「言語」という観点から整理してみたい。

「生活面での利点」

- ・若者が直面するような状況を描いた作品を読むことで、自分自身の生活（人生）の問題を重ね合わせ、解決の手がかりを得ることができる
- ・母文化が反映されている作品を読むことができる
- ・目標文化の理解の窓口となる作品を読むことができる

「学習面での利点」

- ・読み物を通して、疑問をもったり、解釈したり、結びつけたり、探索したりすることができる (Langer 1997)
- ・作品に取り上げられた問題を話し合うことで、より高度な思考力を身につけられる

「言語面での利点」

- ・読み物においては言語のリソースが最も十分にかつ巧みに使われている
- ・読み物は、第二言語と読み書き能力の両方を学習する状況をもたらしてくれる (Langer 1997)
- ・作品に取り上げられた問題を話し合うことで、authentic に言語を使う機会が得られる

以上の指摘から、literature を統合することによって学習や言語面での利点だけでなく、子どもに自分の生き方を考えさせたりや母文化・目標文化の理解を促すという可能性も見いだすことができる。

では、「国語」を取り上げることは他教科を取り上げる場合とどのようにちがうのだろう

か。まずプラス面を考えてみると、

- ・ 数学や理科とちがって国語は、
 - (1) 読んだり書いたりという活動に発展しやすい
 - (2) 教科特有の語彙ではなく、普通の言葉を使って現実世界のコミュニケーションを行える
 - (3) 特に文学的な文章を読む場合、言葉を手がかりとして情景や心情を把握する活動が含まれるため想像力を使って考える機会が多い
- ・ 社会との違いは、
 - (1) 暗記すべき事項が少ない
 - (2) 人名・地名等の固有名詞が少ない

ことがあげられる。逆に「国語」を取り上げる難しさは、内容理解のほとんどを言葉に頼らざるをえないことにある。実験、観察、数式、図形、地図、グラフ等の視覚的な手がかりが、「国語」の教科書（特に小学校高学年以降）では挿し絵以外には殆ど見あたらない。

3、「国語」という教科の特性

「国語」は何を学ぶ教科なのだろうか。この問いに答えるにあたって、まず「国語」は何をめざしているのかということにふれておきたい。

たとえば、『守る、みんなの尾瀬を』（『国語六年』光村図書）という文章を読んだとき、尾瀬に関する知識を蓄えたり認識を深めたりすることは「国語」の第1の目標ではない。「国語」では、この文章を通して論の展開の仕方を学んだり自分の意見をまとめたりするなど、言葉による理解力や表現力を育てていくことをめざすのである。「国語」は道德教育でもなく社会や理科の補完でもなく、言語の教育なのである。しかし、言語が伝達や思考、認識の機能を担っている以上、文章には思想が内包される。先の例でいえば、尾瀬での取り組みを通して環境に対する人間の責任や自然保護について認識を深めていくことが「思想」に関わる部分である。

このように「国語」の学習では、算数における「分数」や「体積」と同じように「尾瀬」について学ぶのではなく、尾瀬に関する文章を通して言葉の使い方を学び、さらには自然環境についての認識を深めていくことをめざしているのである。「国語」は「教材を学ぶ」のではなく「教材で学ぶ」教科なのである。

したがって、内容重視のアプローチの取り組みで「国語」が取り上げられる場合、その内容は算数や理科の場合とは当然性質が異なってくる。たとえば算数では、「長さ」の学習（＝内容）と比較の言い方（＝言語）を統合する試みが報告されている（谷口2000）。しかし「国語」では教科の特性ゆえに、「尾瀬」という内容と何らかの表現形式を結びつけて教えるような図式は成立しない。「国語」における内容は、教材文と、教材文を通して育成される言語能力（＝教材の技能的価値）と、教材文を通して育成される物の見方や考え方（＝教材の内容的価値）という点から論じられるべきなのである。そして、それらの言語能力（＝技能的価値）や物の見方考え方（＝内容的価値）を獲得させるために授業者が設定する質問や学習活動が、「国語」における内容ということができる。

このことについて、「結果と分析」の項で取り上げる教材文を用いて具体例を1つ示しておく。

【表 - 5 「国語」における内容 - 『大人になれなかった弟たちに…』の場合】

	日本人生徒の場合	外国人生徒の場合
教材文	『大人になれなかった弟たちに…』	『大人になれなかった弟たちに…』
教材文を通して育成される言語能力と質問の例	(例)様子を手がかりに心情を捉える 「強い顔」について、そういう表情をしたときのお母さんお気持ちを考えましょう。	(例)叙述を手がかりに様子を考える お母さんは、どんな顔をしていましたか。
教材文を通して育成される物の見方考え方と質問の例	・平和の大切さや命の尊さについて考える 題名の「…」には、筆者のどんなメッセージが込められていますか。	・戦争があったことを知り、平和の大切さに気づく 「ぼく」は何を一生忘れないといいましたか。

【表 - 5】からは、扱う教材が同じであってもその教材を通して何を教えるかということが、日本人生徒と外国人生徒とでは異なっていることが分かる。育成すべき言語能力が異なることは日本語力の差からいえば当然予想されるが、どのように、どれほど異なっているかということについては「結果と分析」の項で詳しく述べていきたい。一方、物の見方考え方についても、文章から読み取る情報量に違いがある以上、同じレベルのものを要求することはできない。

ところで、外国人生徒の教科担任であるT先生（ケーススタディーの対象とした学習者Rの先生）は「Rくんに対しては、断片的な言葉の理解からでも上記1の目標（=日本人生徒に対して設定した物の見方考え方に関わる目標）に近づけたらと考えています」と語っている（2000年10月実施のアンケート調査から）。ここには、なぜ学年相当の教材文を読んでいくことが大切なのかということの理由の一つが語られている。すなわち、発達段階に合った文章を読むことで、教材文のもつ内容的価値が子どもの認知や情意面の発達にも働きかけていくことが期待されるからなのである。

以上のことをまとめてみると、内容重視のアプローチに「国語」を取り上げる場合、

- (1) 教科としての特性の違いから、「国語」の内容と、算数や理科などの内容とを同列に論じることはできない。
- (2) 「国語」における内容とは、ある教材文を通して言語能力や技能を獲得したり、物の見方考え方を深めたり広めたりするために、授業者が教材文に即して設定する質問や学習活動、ということができる。
- (3) 特に、物の見方や考え方（=教材の内容的価値）に関わる部分は、子どもの人間としての成長に働きかけるものであることから、教材文は、子どもの発達段階に応じたものを選定する必要がある。

ということをふまえておく必要があるだろう。

しかし外国人児童生徒の場合、その日本語力の不足ゆえに「言葉は簡単だが発達段階にそぐわない読み物」を与えられることもありうる。これは日本語の学習ではあっても、内容的価値の吟味が伴わなければ「国語」の学習とはいえない。しかし、現実的な問題として、言葉に苦勞する外国人児童生徒が膨大な量の文章を読みこなしていくことは大変難しい。そこで本研究ではその解決策の一つとして、「国語」の授業に母語を活用することを試みた。母語活用の有効性については詳しくは「結果と分析」の項で取り上げていくこととする。

4、研究の目的

- (1) 教科としての「国語」と日本語教育の統合は、単に日本語力の向上や教科理解だけでなく、思考力・自己表現力・想像力等の育成にも貢献することができるかどうか検証する。
- (2) 上記「1」の検証にあたっては、「日本語教育と国語教育を統合した学習モデル」及び「国語における思考力の育成モデル」を用いて、以下の点について明らかにする。
 - 外国人児童生徒の日本語力は、どのくらい向上したのか
 - どのくらい「国語」を理解することができたのか
 - どのような思考力・自己表現力・想像力の出現が認められたか外国人児童生徒に対する「国語」の授業は、母語話者に対する授業とどのように異なるのか
- (3) 内容重視のアプローチを進めるにあたっては母語の活用に着目し、教科学習の場面での母語の活用方法やその有効性について探る。